

十不善業道による世界の損壊

—『カルマ・ヴィバンガ』所説の業報を巡って—

工 藤 順 之

はじめに

「善く行って善く生まれ、悪く行って悪く生まれる」(puṇyo vai puṇyena karmaṇā bhavati, pāpaḥ pāpena iti. *Bṛhad Āraṇyaka Upaniṣad* 3.2.13) とは前5世紀頃のバラモン教の哲人・ヤージュニャヴァルキヤの教えである。この秘密の教えはその後、思想の境界を越え、時代・地域を隔てながら、いわばインド文化圏に支配的となる思想の基、即ち「業報思想」となった。ウパニシャッドの中にその萌芽があることからわかるように、この思想は輪廻説ともども不滅の実体としての自我の存在を前提として成立している。そのような前提がある限り本来的にはブッダの思想から見れば決して相容れないものであったにも拘わらず、仏教の教えの中で実践的な倫理性を支える思想として浸透していった。

「業報思想」とは、簡単に言えば「自己責任と結果の必然性」を説くものにほかならない。好ましい結果(楽果)・好ましくない結果(苦果)がそれぞれ善悪の業をなした当人にもたらされることを意味しているが、個々の業に善悪が区別される以上そこに如何なる業が善であり、或いは悪であるかが問われなければならない。唯一の創造神を信ずる宗教にあっては、その判断は創造神によって決定され与えられる。しかしそのような神を持たなかったインド文化圏では、善悪を決定することはそのまま現実世界での生存の在り方から決定されなければならなかった。

十善業或いは十不善業が、初期經典では主として在家者に示された倫理項目、つまり善悪の行為についての基準として説かれていたことはよく知られている¹⁾。この教説の由来は明確ではないのだが、『マハー・パーラタ』や『バガヴァッド・ギーター』においても、また『マヌ法典』でも同様の教えが説かれており、道徳的観点から十種を取り上げること自体は決して仏教特有のものではない²⁾。おそらくは当時のインドにあって一般的な徳目を仏教とバラモン教とが共有していたものではないかと

考えられている一方で、特に『マハー・バーラタ』の一節が『雑阿含経』第1299経と極めて類似していること、そして両者が共通の伝承、しかもその伝承は『雑阿含経』に近いものに由来している可能性があることが指摘されている³⁾。従って、共通なソースがあったとしても、これら十種を更に「業道」(karma-patha)として、即ち「身・語・意を通して行為のあらわれる在り方」としてその全体を一つの教説に体系化したのは仏教思想の中で行われた独特なものであったと言ってもよいだろう⁴⁾。

本稿で問題とするのは、善悪業についての具体的な、一種の倫理的規準となった「十(不)善業道」であり、業とその果報との関係を種々に解き明かしていく代表的な文献群「鸚鵡経類」の一つ『(マハー・)カルマ・ヴィバンガ』([Mahā-]Karmavibhaṅga = KV)を中心にしてその内容を扱いたいと思う。そこには、業の原則である「自己責任性」(「自業自得」)が説かれるばかりでなく、自己の業が世界の成長・損壊をもたらすという外的世界への関与(仏教の宇宙論)までが記述されているからである。

1) 初期経典の多くでは十善を行うことによって命尽きた後「善趣、天界に生まれる」、十不善(十悪)を行うことによって「苦界、悪趣、墮処、地獄に生まれる」という関係を説き、十善が在家者のみの徳目ではなく、出家者に対して説かれる場合には「涅槃に至る」道であることを説いている。十(不)善業を説いている経典は、阿含・ニカーヤの中にもかなりの数に上るが、十種の列挙される順番或いは漢訳語は必ずしも固定したものにはなっていない。また、十善業道は大乗仏教では戒波羅蜜の具体的な内容として「十善戒」と呼ばれ、より積極的な意味合いでの誡めとなる。こうした諸問題については本稿では扱わない。参考文献に挙げたものの内、特に川田[1954]、佐々木教悟[1978]、土橋[1957]、平川[1968, 1991, 2000]、北条[1981]のほか、『仏教学セミナー』第20号、雲井昭善編『業思想研究』所収の諸論文を参照されたい。

2) *Mahābhārata* 13.132.3-37; *Bhagavadgītā* 17.14-16, 18.15; *Manusmṛiti* 12.3-7.

3) この点は榎本[1982]によって明らかにされた。即ち、「MBh 13.132と雑阿含1299は両者に共通する単独の原伝承に基いて成立していると言える。ただ、MBhの方が雑阿含より増広されている点や、婆羅門教における生天の要因、祭祀(yajña)が言及されず、布施(dāna)や苦行(tapas)も強調されていない点は、その原伝承が婆羅門教的な色彩がうすく、雑阿含により近かったことを示唆するものであろう。」(p. 960)

4) 『俱舍論』では、何故十種であるのかを述べている。*AKBh* 238: *teṣāṃ eva sucaritaduṣcaritānāṃ caudārikasamgrahena daśa karmapathā. sūtra uktāḥ yathāyogaṃ kuśalāḥ sucaritebhyaḥ 'kuśalā duṣcaritebhyaḥ*; 玄奘訳『俱舍論』(T 1558, 29, 84b14-19): 「論曰。於前所說。惡妙行中若龜顯易知攝為十業道。如應若善攝前妙行。不善業道攝前惡行。」(真諦譯『俱舍釋論』[T 1559, 29, 240b10-13]では下線部が「惡行及善行中。由攝明了易知善惡二業。是故經中說十業道。」となっている。)

上記の説明によれば、「明瞭にして分かり易い」(龜顯易知/明了易知/audārika)もの十種が業道として立てられていることになるのだが、単に顕著であるということだけでなく善悪が分かり易いということは実は前もって常識的・通俗的な倫理上の判断が共有されていたということである。

1. *Karmavibhaṅga*

1.1. KV §§ 51-61 の位置づけ

KV に説かれている業報の諸相を詳細に見ていくと、その教説の仕方は一定していない⁵⁾。以下に取り上げる第 51-61 節の記述は、この文献で見られる業報列挙の仕方としても、その内容としても、ある意味でテキスト構成上の分岐点とも言えるものとなっている。第 50 節までが概ね一般的・世俗的な業報を説くものに対して、第 62 節以降は、最後の 4 節を除けば、全てが仏塔崇拜や布施、寄進によって得られる功德を扱う。つまり、出家・在家を問わず、宗教的救済を強く意識した内容になっているのである。ところが第 51-61 節は一方で世俗的と見なされる果報を説くが、その内容は個人の為した業が自己を含めた外的世界にもたらす果報となっている。このような外界への関わりを業報として説く箇所はこの文献には他に存在しない。

また *uddeśa* 部分を他のヴァージョンと比較すると、第 61 節までの節見出しを列挙するのは KV と Ch-5, 6, Tib2-3 であり⁶⁾、第 62 節以降を挙げるものは KV と Ch-5 だけである。このことは第 61 節までのテキストに第 62 節以降の内容が付加されたことを意味している。また第 51-61 節を *uddeśa* に挙げるヴァージョンでもその記述の流れの悪さ (*uddeśa* の途中であるにも拘わらず新たな会話文を導入する句によって十不善業道を挙げること、「外法」に関して全く触れられていないものがあること) はこれらが第 50 節までのテキストに付加されたことを強く示唆する。従って、テキストの形成過程を考えると、第 51-61 節が付加された後で、更に第 62 節以降が付加されたものと思われる⁷⁾。

更に、KV の二写本とも「十不善業道」に関して「外法の悪化」があることを項目として明記しているが、「十善業道」による「外法の衰退」を項目として挙げるのは B 写本のみで Lévi もこの読みに従ってテキストを校訂している。ところが、その B 写本でも各論部分のテキストでは「十不善業道」に関する部分が終わると直ぐに次の

5) 業報項目の説明の仕方が一貫していないことと、特に第 51-61 節を挟む諸節の位置づけに関わる問題については、本稿の続きとなる別稿で扱った (拙稿 [2004a: 226-227])。そちらを参照していただければ幸いである。

6) Lévi [1932] で T¹ (= Tib1), T² (= Tib2) とされているもの以外に、W. Simon が見出した「より初期のサンスクリット本を反映している」とされるチベット訳を Tib3 と呼ぶことにする (Simon, "A Note on the Tibetan Version of the *Karmavibhaṅga* Preserved in the MS Kanjur of the British Museum," in: *BSOAS* 33-1, 1970, 161-166)。それはロンドン、トク・パレス、ブタック等の写本カンギュルに含まれている。詳細については拙稿 [2004a]。

7) 勿論、第 50 節までと言ってもそれら全てが揃っていたわけではないだろうし、第 62 節以降も一括して或いは順次に付加されたのかどうかは不明である。更に十不善を個別に説くことが初めからあったかどうかとも疑わしい。詳しくは前掲拙稿 [2004a: 227-231]。

第 62 節（仏跡巡礼に関係する功德）が始まっており、結局 KV では「十善業道」によって影響される外法については説かれていない。尚、その記述は漢訳とチベット訳にはある⁸⁾。ほぼ「十不善業道」の内容と反対になったものである。

1.2. KV における「十不善業道」の記述

では、KV 各論部分での記述を見ていこう。以下に示す KV のテキストは Lévi 出版本の分節に従って、その校訂の基になった二写本を校合したものである。写本特有の誤写等については大部分省略し、異読として見なせるものはテキスト下に記載した。^{補注 1)} テキストは全体として欠落の少ない A 写本を基にしているが、フォリオの欠落或いはその部分が存在しない為に一つの写本の読みしか得られない場合にはそこを斜体にしてある。また、対応する二つの漢訳も対照した。

§ 51. Lévi 77.24-78.3; A not available; B28v.4-5; Ch-5, 894b14-15; Ch-6, 899a23-24.

(B28v.4) *daśākuśalā karmaṣaṭṭhāḥ | katame daśa trividhaṃ kāyakarma caturvidhaṃ vākkarma trividhaṃ manaskarma | eṣān daśānāṃ* (B28v.5) *(akuśalā)[n]āṃ karmaṣaṭṭhānāṃ vipākena daśānāṃ bāhyānāṃ bhāvānāṃ abhivṛddhir bhavati |*

「十不善業道がある。十種とは何か。身体による業が三種、口による業が四種、心による業が三種である。これら十不善業道の結果として十種の外法が悪化するるのである。」

Ch-5: 復有十業。得外惡報。若有衆生。於十不善業。多修習故。感諸外物。悉不具足。

Ch-6: 復次十不善業獲果云何。

§ 52. Lévi 78.4-7; A not available; B28v.5-6; Ch-5, 894b15-16; Ch-6, 899a24.

{*vena samanvāgataḥ*} *prāṇātīpātasyākuśalasya karmaṣaṭṭhasya vipākena pṛthivyā* (B28v.6)-
(*m ojaś ca tejaś cāntar*)[*ddh*]iyante (1) | *tasyaiva ca karmaṇo vipākenālpāyur bhavati ||*

(1) On *ojaś ca tejaś cānta-*, see T.: *sa'i mdangs dang gzi byin nub par gyuro* (Lévi, p. 78, fn. 2).

「殺生という不善業道の結果として大地から光沢／勢力と熱が失われる。そしてその行為の結果として（人は）短命となる。」

8) 漢訳は Ch-5, 894b28-29; Ch-6, 899b3-11. チベット訳については、Lévi [1932: 80-82, fn. 8] に長い脚注で扱われている。十不善業道に関するチベット訳諸本を暫定的に付き合わせたテキストは別稿に付した（前掲拙稿 [2004a: 249-254]）。

補注 1) 転写テキストは Kudo [2004] にあり、§ 51-61 はその pp. 170-171 にある。

Ch-5: 一者以殺業故。令諸外報。大地鹹鹵。藥草無力。

Ch-6: 殺命爲因。壽量色力而非滿足。

§ 53. Lévi 78.8-9; A-50r.1; B28v.6-29r.1; Ch-5, 894b17-18; Ch-6, 899a25.

*adattādānasyākuśalasya karmapathasya vipākena pṛthivyām
asaniśukaśalabhamūṣikakīṭaprabhṛtaya*(B29r.1)(*h sasyaghātakā utpadya*)nte(1) | *tasyaiva
karmaṇo* (A50r.1) *vipākena bhogavyasana(m) adhigacchati* ||

(1) Approximately eight akṣaras were lost in the MS[B]; this portion is reconstructed by Lévi.

「不与取という不善業道の結果として大地に雹・鸚鵡・蝗・鼠・昆虫などの穀物に害を与えるものが生まれてくる。まさにその行為の結果として（人に）食物の欠乏が始まる。」

Ch-5: 二者以盜業故。感外霜雹螽蝗蟲等。令世飢饉。

Ch-6: 偷盜所得霜雹蟲蝗飢饉水旱。

§ 54. Lévi 78.13-17; A50r.1-3; B29r.1-3; Ch-5, 894b18; Ch-6, 899a25-26.

kāma <mi> > *thyācārasya akuśalasya karmapathasya vipākena pṛthivyām* (1) *ṛṇadarbhādīni*
(B: *ṛṇakuśavanadurgasarvadurgandhāni*) (B29r.2) *prādurbhavaṃti* | *tasyaiva karmaṇo*
(A50r.2) *vipākena saṃpanna(m) grhāvasaṃ pravisanti* |

atrāvadānaṃ Subhṛapadasya (B: *Śvabhṛapadasya*) *Kosadhī* (B: *Sūsudhī*) *dārikā*
Kāśirājñāḥ patnī Devāvatāraṇe Kālodā(A50r.3)*yinaḥ pūrvaja*(B29r.3)*nmany avadānaṃ*
vaktavyaṃ ||

(1) MS[A] omits this word.

「邪姪という不善業道の結果として地上では植物・草原等が【MS[B]を訂正して *ṛṇakuśavanadurgandhāni* と読めば「悪臭を放つ葉・草・木々が】繁茂する。まさにその行為の結果として（人々は）整えられた住居で住むことになる⁹⁾。

ここでシュヴァブラパダのアヴァダーナ、カーシー王の妻となったシュシュディー女（の話）、デーヴァーヴァタラナのカーローダーインの前世に於けるアヴァダーナが語られるべきである。」

Ch-5: 三者邪姪業故。感惡風雨。及諸塵埃。

Ch-6: 邪欲所獲外多塵垢妻不貞良。

§ 55. Lévi 78.18-79.2; A50r.3-4; B29r.3-4; Ch-5, 894b18-19; Ch-6, 899a26-27.

mṛṣāvādasya akuśalasya karmapathasya vipākena mukharogadantarogagalarogamukhā-
(A50r.4)ddaurgandhādini (1) prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo vipākenābhūtābhyākhyānaṃ
(2) (B29r.4)pratilabhati ||

(1) MS[B]: *mukharogagalarogāḥ mukhadurgandh{y}ādini ca.* (2) MS[B]: *°ābhūtāvyākhyānāni.*

「妄語という不善業道の結果として口の病・歯の病・咽喉の病・悪しき口臭などが生じてくる。まさにその行為の結果として（人は）真実でない話に取り憑かれる。」

Ch-5: 四者妄語業故。感生外物。皆悉臭穢。

Ch-6: 虚妄所獲臭氣惡名人皆嫌厭。

§ 56. Lévi 79.3-6; A50r.4-v.1; B29r.4; Ch-5, 894b19-21; Ch-6, 899a27.

piśunavacanasya akuśalasya karmapathasya (A50r.5) vipākena prthivyāṃ śarkarakathalliyādini

(1) duḥkhasaṃsparśādini prādurbhavaṃti | *tasyaiva karmaṇo vipākena jātivyasan(ā)*
mitravasyanā bhavaṃti tebhyaḥ (2) *pari(A50v.1)vāraś ca bhava{n}ti* (3) ||

(1) MS[A]: *sakarakathillakādini* (scribal errors for *śarkara* and *kathalya*). (2) For *bhedyah*.

(3) MS[B] omits this sentence (*tasyaiva ... bhavati*) as a whole.

「両舌という不善業道の結果として地上では触れただけで苦痛を与える砂・砂利等が生じる。まさにその行為の結果として（人に）家族の災厄・友人の困窮がやってくる。そして眷屬が不和となる。」

Ch-5: 五者兩舌業故。感外大地。高下不平。峻崖峻谷。株机槎菜。

Ch-6: 離間所獲眷屬不和疾病縈纏。

9) この「住居云々」という内容は邪淫から生ずる何かしら「悪化」した事態を示しているようには思えないが、これについて理解の一助になるであろう記述が「世記経類」にある（『世記経類』についてはこの後、2.1.で扱う）。これは成劫の時代に光音天にいた衆生が地上に降りてきて、大地に様々な食べ物が生じ、それを食べていくうちに、人の形をとり、美醜が生じ、不善を為すようになっていく部分にある。『長阿含經』『世記經』世本緣品（T 1(30), 148a21-b3）：「其後衆生便共取粳米食之。其身羸醜有男女形。互相瞻視遂生欲想。共在屏處爲不淨行。（中略）其後衆生遂爲姪逸不善法増。爲自障蔽遂造屋舍。以此因緣故始有舍名。」（その後人々は粳米を取って食べ始めた。その身体は粗く、醜くなり、男女の区別が生じた。互いをじっと見るようになり、欲望をもつようになり、物陰に行つて不淨な行いをするようになった。（中略）その後、人々は淫らとなり放逸になり、不善を益々行い、自分たちを隠す爲に小屋を建てるようになった。この因緣から「有舍」（小屋）という名が始まったのである。）これに対応するのは『大樓炭經』『天地成成』（T 23, 1, 308a13-22）；『起世經』『最勝品』（T 24, 1, 361c24-362a16）；『起世因本經』『最勝品』（T 25, 1, 416c27-417a20）である。また『長阿含經』『小緣經』（T 1(5), 1, 38a1-10）；Pāli. DN *Aggaññasuttanta*, III. 89; 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』卷第一（T 1450, 24, 99c17-100a4）；*Saṅghabhedavastu* (ed. by R. Gnoli, Part I, Roma, 1977, 11.25-12.1) にも同様に「住居」の起源が述べられている。

§ 57. Lévi 79.7-9; A50v.1-2; B29r.4-5; Ch-5, 894b21-22; Ch-6, 899a27-28.

paruṣavacaso(1) 'kusalasya karmapathasya vipākataḥ(2) pā(B29r.5)ṃśu-
rajodhūlivāta<<vr>>ṣṭyādīni prādurbhavanti | tasyaiva ca karmaṇo vipāke(A50v.2)na
amañojñaśabdaśravaṇadarśaṇāny anubhavanti |

(1) MS[B]: *paruṣavacanasyākuśalasya*. (2) MS[B]: *vipākena*.

「悪口という不善業道の結果として砂・塵・微塵（が飛散し）風・雨等が降る。まさにその行為の結果として（人は）不快な音を聞き、（嫌な光景を）見るようになる。」

Ch-5: 六者悪口業故。感生外報。瓦石沙礫。塵澁惡物。不可觸近。

Ch-6: 塵惡所獲觸對硬澁果實非美。

§ 58. Lévi 79.10-12; A50v.2; B29r.5-6; Ch-5, 894b22-23Ch-6, 899a28-29.

saṃbhinnapralāpasya akuśalasya karmapathasya vipākena(1) (B29r.6)
(*parva*)takandaraśvabhṛādīni prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo vipākena anādeyavacanā
bhavanti ||

(1) MS[A] lacks approximately one line probably due to the scribe's eye jumping across to the next line: *karmapathasya vipākena*.

「綺語という不善業道の結果として（山）・峡谷・窪地等が生ずる。まさにその行為の結果として（人は）誰にも受け入れられない言葉を話すようになる。」

Ch-5: 七者綺語業故感生外報。令草木稠林。枝條棘刺。

Ch-6: 雜穢所獲林木叢刺園苑荒殘。

§ 59. Lévi 79.13-15; A50v.2-3; B29r.6-v.2; Ch-5, 894b23-24; Ch-6, 899a29.

abhidhyāyā akuśalasya karmapathasya vipākena vṛhiyavagodhūmādinām (A50v.3) śasyānā(m)
tuṣapala(B29v.1)ṃjādīni(1) prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo vipākena(2)
paraprārthanīyānām bhogā(3) bhavanti || (B29v.2) ||

(1) Lévi: *palālādīni*. MS[B]: *tuṣamala + dhādīni*. Tib.: *gra ma dang spu bu* (Lévi 79, fn. 6).

(2) MS[B] has misplaced sentences after this word, which correspond to the last line in § 60 beginning from “*pratikūladarśano*” up to “*tiktakaṭukabhāvāny api ca*” in § 61. (3) Read *bhogā* (nom. pl.). MS[B]: *paraṇprārthanīyabhogā*.

「食欲という不善業道の結果として米・大麦・小麦等の穀物は穀・藁等しか生らなくなる。まさにその行為の結果として（人は）他人に恵んでもらって食べるように

なる。」

Ch-5: 八者以貪業故。感生外報。令諸苗稼子實微細。

Ch-6: 貪愛所獲。庫藏寡少。

§ 60. Lévi 79.16-18; A50v.3-5; B29v.2l Ch-5, 894b24-25; Ch-6. 899a29-b1.

vyāpādasya aku(A50v.4)śalasya karmapathasya vipākena prabhūte {cy}upte (1) niṣphalam
asya phalaṁ vāśasyaṁ bhavati (2) | tasyaiva ca ka<r>maṇo vipākena {a}pratikula-
(A50v.5)darśano (3) bhavati ||

(1) Read *upte*. MS[B]: *upe*. (2) MS[B]: *niṣphalavān sasyam bhava{n}ti*. (3) For °*kūla*°. MS[B]: *vipākenāpratikūladarśano*.

「瞋恚という不善業道の結果として沢山の種（を蒔いた）としても実は生らず、実は（生ったとしても）収穫とならない【MS[A]: *vā + aśasyam* として読む。MS[B] なら「実を付けないものが収穫される】」。まさにその行為の結果として（人は）不快な容姿となる【写本は共に *apratikūla* とあるが Lévi に従い *pratikūla* と読む】。」

Ch-5: 九者以瞋業故。感生外報。令諸樹木果實苦澁。

Ch-6: 瞋恚所獲果味辛辣容貌醜惡。

§ 61. Lévi 79.19-80.13; A50v.5-51v.1; B29v.2-30r.1; Ch-5, 894b25-27; Ch-6, 899b1-2.

mithyādr̥ṣṭ(e)r akuśa(B29v.3)lasya karmapathasya vipākena tiktakaṭukā bhavanti |
picumarddakoṣātakiviṣatiktālāvṛprabhūti(A51r.1)ni (1) phalāni prādurbhavanti | tasyaiva
ca karmaṇo vipākato (2) nā(B29v.4)stikyavādī bhavaty ucchedadr̥ṣṭiḥ | lokāyatanādiṣu
śāstreṣu prasādo bhavati |

yathā Padā(A51r.2)śvasya rājaputrasya yaḥ Kumārakāśyapena Śvetavi{pā}kāyāṁ (3) vinīto
lokāyati(B29v.5)kaḥ |

yathā yathā manvā (4) imān* daśakuśalān* ka(A51r.3)rmaphān atīva (5) bhaviyanti
(6) | tathā tathā eṣā(m) daśānām *bāhyānām* (7) bhāvānām atīva prādurbhāvo bhavati |

anenaiva kāraṇena Abhidharme uktaḥ (B: *Mahāsamva* (B29v.6) + + + +)(8) |
bhaviṣyati (A51r.4) samayo 'nāgate (')dhvani yat tilā bhaviṣyanti | tilapiṣṭam na (9)
bhaviṣyati | telam (10) na bhaviṣyati | ikṣu(r) bhaviṣyati | ikṣuraso na bhaviṣyati (A51r.5)
| guḍo na bhaviṣyati | na khyāṇḍā (11) bhaviṣyati | na ca sa(B30r.1)rkarā bhaviṣyanti | *gāvo*
bhaviṣyanti | *kṣīram* *bhaviṣyati* | *dadhiṁ* *bhaviṣyati* | *navanītam* *na bhaviṣyati* (12) | na
ghṛtam na ghṛtamaṇḍo bhaviṣyati | evam anupūrveṇa sarveṇa sarve rasā a(A51v.1)-

ntarddhāsyamti || ◎ ||

(1) Read *koṣātakī* (< *koṣātakī*); *ālābu/alābu* (< *ālāvṛ/alāvṛ*). (2) MS[B] reads “*mithyādr̥ṣṭer akuśalasya karmaṣaṭhasya vipākena* |” instead of “*tasyaiva karmaṇo vipākena*”. (3) Both Mss read “*śvetavikāyām*”; but this name of a place is unknown. Probably a w. r. for *śvetikāyām*. (4) A scribal error for *satvā*. (5) MS[B] omits *atīva*. (6) A scribal error for *bhāvayanti*. (7) MS[A] omits this word. (8) MS[B]: *mahāsamva* + + + + + *[i]ṣyati*. Lévi reconstructs: *mahāsamvartakalpe* (based on T: *mam par ’jig pa’i che*). (9) MS[B] omits *na*. (10) For *tailam*. (11) Read *khaṇḍam*. (12) MS[A] lacks the sentences in italic.

「邪見という不善業道の結果として苦くて鹹いものが生じる。(即ち) ピチュマルダ、コーシャータキー、毒を持ち苦い【viṣa-tikta. 或る植物名?】アーラープなどの果実が生じてくるだろう。まさにその行為の結果として(人は) 虚無論者となり、断滅論者(となり)、ローカーヤタなどの論書に親近感をもつようになる。

例えばシュヴェーターにおいてクマーラ・カーシャバに導かれてローカーヤタ論者になったパールシュヴァ王子のように。

人々がこれら十不善業道を更に働くようになればなるほど、先ほどの十の外法の出現が激しくなってくるのである。

そしてこの理由によって(次のように) アビダルマに説かれているのである【Léviの復元では「マハーサンヴァルタ劫において」】。未来世においてもこのようになるだろう。(即ち) 胡麻はあるだろう。胡麻をすりつぶしたのものもあるだろう【MS[B]の読み。MS[A]で読めば、「ないだろう」。以下に述べられる内容からして、抽出したものがなくなるということを意図していると考えられるから、LéviとMS[B]の読みの方がその文脈に合う】。(しかし) 胡麻油はないだろう。サトウキビはあるだろうが、サトウキビの絞り汁はないだろう。粗糖もないだろう。粉砂糖もないだろう。粗目糖もないだろう。牛はいるだろう。牛乳もあるだろう。凝乳もあるだろう。(しかし) バターはないだろう。ギーもギーの上澄みもないだろう。このように一々を数え上げていってもきりがないが、一切の味(rasa)は失われるだろう¹⁰⁾。」

10) ここで言われている rasa という語に関しては岡野 [2002a: 222-227] を参照の事。彼に依れば正量部は rasa の意味を単なる「美味」として取ったのではなく sāra「精髓」の意味で解釈していたとされる。KV が「胡麻はあるが胡麻油はない」・「砂糖黍はあるがその汁はない」という表現を持っていることは、KV もまた rasa を「精髓」の意味で取っていたことの証左であるとしている(岡野はこの部分が正量部文献のみとパラレルになっていることを発見し、KV が正量部所属であると考えている[後述]。KV の第 61 節に関わる諸問題については拙稿 [2004a] 参照)。

Ch-5: 十者以邪見業故。感生外報。苗稼不實。收穫尠少。以是十業。得外惡報。

Ch-6: 愚癡所獲外色不潔果實虛耗。十不善業因之所得。

1. 3. KV と対応漢訳

以上が、KV にまとめられている十不善業道による「外法の悪化」である。対応漢訳と比べてみると、内容的に三者がほぼ対応していると見なせる節は § 53 と 55 で（後者は外界に現れる変化とは思えないが）、実が少ないことを中身が無いと拡大的に理解すれば 59 もほぼ対応している。残りは三者三様に違っているもの（52, 56, 57¹¹⁾）、漢訳同士が対応しているが KV は異なっているもの（54, 58, 60, 61）となっている。より細かく見ていけば対応の度合いは更に複雑となるが、特に 60 と 61 とは KV と漢訳とで生ずる結果が逆に入れ替わっている。こうした「外法の悪化」の対応の違いがそれぞれの基テキストに初めからあったものなのかどうか、そしてその違いに何らかの教理上の相違が反映されているのかどうかはこのままではわからない。

また、KV の記述には二種類の「結果」(vipāka) がそれぞれ説かれている。一方は「～という不善業道の結果として」(akuśalasya karmaṣaṭṭha vipākena, Tib.: mi dge ba'i las kyi rnam par smin pas) という共通の句に導かれる「外法の悪化」であり、他方は「まさにその行為の結果として」(tasyaiva karmaṇo vipākena, Tib.: las de nyid kyi rnam par smin pas) という句に導かれる、概ね個人の身に現れる結果である。こうした表現の使い分け、つまり十の項目全てについて業道による結果と業による結果を併記していることは、業と業道との違いを意識し、またそれぞれによってもたらされる果報が外的なものなのか内的なものなのかを区別しようとしていたものであると理解することが可能であろう。先に述べた梵本と漢訳との「外法の悪化」の内容の違いと同様に、この使い分けが果たして部派的な差異を反映したものであるのかどうか、これだけでは断定できない。ただ、対応漢訳が共に「十不善業」とあって「業道」という語を用いていない点は注意が必要だろう。ともかく結論を急ぐ前に、十不善業道による「外法の悪化」という発想を他文献で確認しておこう。

11) 但し、§ 57 は Ch-5 の一部が KV に対応している。

2. 阿含資料に見られる「外法の悪化」

2.1. 十不善と世界の破壊：「世記経類」

十不善（或いは十悪）が外的事物に影響を及ぼすという内容は、阿含經典の中にも既に見出される。特に仏教の宇宙論を記述する代表的な「世記経類」¹²⁾には、世界が破壊される「壊劫」に火災・水災・風災の三災が起きるとされていて、そうした災害が起きる直前までは人々は十善行を修めているとしている¹³⁾。

世界の安定期にあたる「住劫」では人寿の増減と世界の衰退が繰り返されるが、人寿が十歳になった時、世界は次のような有様を呈していると語られる。「世記経類」全てにはほぼ同様の記述があり、以下は法蔵部所属とされる『長阿含經』からの引用である。（下線部分は十悪に関係する箇所、外界の有様を記述した部分には破線を付した。内容的にはKVで述べられたことが含まれている。）

『長阿含經』第三十經「世記經」三中劫品（T 1(30), 1, 144a19-c10）¹⁴⁾。

佛告比丘。有三中劫。何等爲三。一名刀兵劫。二名穀貴劫。三名疾疫劫。

云何爲刀兵劫。此世間人本壽四萬歲。其後稍減壽二萬歲。其後復減壽萬歲。轉壽千歲。轉壽五百歲。轉壽三百歲二百歲。如今人壽於百歲少出多減。其後人壽稍減。當壽十歲。是時女人生五月行嫁。

時世間所有美味。酥油蜜石蜜黑石蜜。諸有美味皆悉自然消滅。五穀不生唯有稗稗。

是時有上服錦綾綉絹劫貝毳摩。皆無復有。唯有羸織草衣。

爾時此地純生荊棘蚊虻蜂螫蛇毒虫。金銀琉璃七寶珠玉自然沒地。唯有石沙穢惡充滿。

是時衆生但增十惡。不復聞有十善之名。乃無善名。況有行善者。爾時人有不孝父母不敬師長。能爲惡者則得供養人所敬待。如今人孝順父母敬事師長。能爲善者則得供

12) 「世記経類」については雑誌『アーガマ』に掲載された『現代語訳・長阿含經』「世記経」に付された引田弘道による解説を参照されたい（『同』第100号、1989.2、pp.164-181。尚、同経和訳の掲載号は以下の通り：51, 56, 62, 68, 75, 93-94, 96-100号、1984-1989。この点については訳者の一人でもある菅野博史教授のお手を煩わせた。ここに記して感謝申し上げます。）

また、終末論との関係から「世記経類」を扱ったものとしては梶山雄一 [1992, 1997] がある。

13) ただ、『大樓炭經』のみが火災の前には「十悪事を犯し」、その為「天が雨をふらせること、不順となる」とする（梶山 [1997: 23-24]）。

14) ここに挙げる大蔵經の頁・行数は三災を記述する部分全体である。対応する他の經典の当該箇所は次の通り：『大樓炭經』「三小劫品」（T 23, 1, 302a23-c4）；『起世經』「劫住品」（T 24, 1, 352b22-354a9）；『起世因本經』「劫住品」（T 25, 1, 408b25-409a13）。

養人所敬待。彼人為惡便得供養。亦復如是。

時人命終墮畜生中。猶如今人得生天上。時人相見懷毒害心但欲相殺。猶如獵師見彼群鹿但欲殺之無一善念。其人如是但欲相殺無一善念。

爾時此地溝澗溪谷山陵堆阜無一平地。時人來恐怖惶懼衣毛為豎。[-144b12]

そして三災（刀兵・飢饉・疾疫）が起きる¹⁵⁾。この三災の内、飢饉劫では十不善を行っていたが為に雨が降らず、飢饉に陥るとされる。

『長阿含經』「世記經」（ibid., 144b26-c1）¹⁶⁾：

佛告比丘。云何為飢饉劫。爾時人民多行非法。邪見顛倒為十惡業。以行惡故天不降雨。百草枯死。五穀不成但有莖稈。

云何為飢饉。爾時人民收掃田里街巷道陌糞土遺穀以自存活。

上記「世記經類」では十惡の横行と外的世界の環境的悪化が連動させられていることが分かる。しかし、ここでは具体的・直接的に個々の不善によってもたらされる結

15) 劫末の三災は部派仏教でも説かれる（梶山、岡野論文参照）。『婆沙論』にはそれら未来世における三災を回避する為の教えが「聖言」という言葉で語られている。「此三災横雖復難除。然有聖言說彼對治。謂若有能一日一夜持不殺戒。於未來生決定不逢刀兵災起。若能以一訶梨怛鷄。起殷淨心奉施僧衆於當來世決定不逢疾疫災起。若有能以一搏之食起殷淨心奉施僧衆。於當來世決定不逢飢饉災起。」(T 1545, 27, 693b7-13)。岡野はこの部分を取り上げて劫末における「サバイバルへの関心がわずかながら顔をのぞかせている」と指摘し、本格的なサバイバルの思想を持つのが正量部であると考えている（岡野 [2003: 87-88]）。興味深いことに『婆沙論』で挙げられた3つの方法は全てがKVの業報解説部分に現れる。「刀兵災」を回避するには常に不殺生戒を保つことであるが、KV § 1には短命になる業を説き、その解説に家畜祭を行う畜場の建立が無意味であると述べた後で突如として「同様に、多くの人々や象や馬、水牛等が殺される戦争の有様と同じである。戦争に関わっている人々が刀剣を好むのと同様である」（Lévi 33.6-8; A11v.4-5; B7r.6）とある。そして§ 2には殺生を止めることによって長寿となると述べた後で、唐突に「先に述べた戦争の有様などは善の観点から（理解されるべきである）」（Lévi 34.3-4; A12v.2; B7v.4）とあり、文脈的におかしい内容が語られる。これらは何かの意図があって戦争を引き合いに出しての不殺生を勧めているように思われる。またKV § 46にはサンガにハリータキー（訶梨怛鷄）を供養したことによって生涯に渡り病に罹らず、頭痛すら起こさなかったバクラの話（Lévi 76.10-17; A48r.2-5; B27v.2-4）と独覺に食事の供養をしたことによってどの生まれ変わりにおいてもありとあらゆる生活必需品・食べ物に事欠くことなく、飢饉の際には世尊と五百人の僧たちに食事を提供できたアニルッダの話（Lévi 76.17-77.4; A48r.5-v.3; B27v.4-28r.1）が引用されている。これらは『婆沙論』に述べられる「疾疫災」と「飢饉災」を避ける為の教えに一致している。このような符合がはたしてKVの正量部所属説と関係しているのかどうか、また『婆沙論』の記述を直接受けているかどうかは分からないが、業報の例証として引用された内容が「サバイバル」の条件として全て一致している点はどこかに共通のソースがあったのではあるまいか。

16) Cf. 『大樓炭經』「三小劫品」（T 23, 1, 302b21-27）；『起世經』「劫住品」（T 24, 1, 353c25-29）；『起世因本經』「劫住品」（T 25, 1, 408c29-409a4）。

果としての内容が説かれているわけではない。要するに、この世界（この時代）の悪しき様相が人間の為した行為と関わっているということを記述しているのであって、積極的に業報という意識を打ち出したものではない。

2.2 十（不）善と寿命：「轉輪聖王經」関係文献

仏教の宇宙論を同様に記述している以下の文献¹⁷⁾では人の寿命が減じていくことを詳細に語っており、そこでは十不善業を順次行うことによって人の寿命は半減し、ついには十歳にまでなってしまうのであると言う。逆に十善を一つずつ漸次増やして修することによって寿命は倍増していき、再び八万歳に戻ると言う。

『長阿含經』第六經「轉輪聖王修行經」(T 1(6), 1, 40c23-41c29)¹⁸⁾。

時人正壽四萬歲。其後轉少壽二萬歲。然其衆生有壽有夭有苦有樂。彼有苦者便生邪姪貪取之心。多設方便圖謀他物。是時衆生貧窮劫盜。兵杖殺害轉轉滋甚。人命轉減壽一萬歲。

一萬歲時。衆生復相劫盜。爲伺察所得。將詣王所白言。「此人爲賊。願王治之。」王問言。「汝實作賊耶。」答曰。「我不作。」便於衆中故作妄語。

時彼衆生以貧窮故便行劫盜。以劫盜故便有刀兵。以刀兵故便有殺害。以殺害故便有貪取邪姪。以貪取邪姪故便有妄語。有妄語故其壽轉減。至于千歲。

千歲之時便有口三惡行始出于世。一者兩舌。二者惡口。三者綺語。此三惡業展轉熾盛。人壽稍減至五百歲。

五百歲時衆生復有三惡行起。一者非法姪。二者非法貪。三者邪見。此三惡業展轉熾盛。人壽稍減。三百二百。我今時人乃至百歲。少出多減。如是展轉爲惡不已。其壽稍減當至十歲。

十歲時人。女生五月便行嫁。是時世間酥油石蜜黑石蜜諸甘美味不復聞名。粳粮禾稻變成草莠。綵絹錦綾劫貝白氈今世名服時悉不現。織麤毛縷以爲上衣。

是時此地多生荆棘。蚊虻蠅虱蛇虻蜂蛆毒蟲衆多。金銀琉璃珠璣名寶。盡沒於地。遂有瓦石砂礫出於地上。

當於爾時。衆生之類。永不復聞十善之名。但有十惡充滿世間。是時乃無善法之名。其人何由得修善行。是時衆生能爲極惡。不孝父母不敬師長。不忠不義返逆無道者便

17) これらの文献と「世記經類」との成立史的関係については岡野 [2000a: 228-230] 参照のこと。

18) 同様に『中阿含經』第七十經「轉輪王經」(T 26(70), 1, 522c4-524c1)。

得尊敬。如今能修善行孝養父母敬順師長。忠信懷義順道修行者便得尊敬。

爾時衆生多修十惡多墮惡道。衆生相見常欲相殺。猶如獵師見於群鹿。

時此土地多有溝坑溪澗深谷土曠人希行來恐懼。

上記も特に十不善の一つ一つに外法ということを結びつけているとは言えないが、ほぼ同様の文脈を有する「世記経類」の記述に比べると、内容が増広され十（不）善が人の寿命の長さに直接に影響するという関係が明確に述べられている。

2.3. 十不善と外法

阿含資料の幾つかの經典には不善に依ってもたらされる結果を外物に特化して述べたものがある。例えば次の『増壹阿含經』卷第四十三にある經典である。

『増壹阿含經』卷第四十三「第四十七・善惡品」（二）（T 125, 2, 781a8-23）：

... 爾時世尊告諸比丘。「由十惡之本。外物衰耗。何況內法。云何爲十。所謂殺盜淫妄言綺語惡口兩舌鬥亂彼此嫉妬害害心懷邪見。

由殺生報故。衆生壽命極短。由不與取故。衆生便貧賤。由淫泆報故。衆生門不貞良。由妄語故。衆生口氣醜弊。致不鮮潔。由綺語故。致土地不平整。由兩舌報故。土地生荊棘。由惡口報故。語有若干種。由嫉妬故。以致穀不豐熟。由害害報故。多諸穢惡之物。由邪見報故。自然生八大地獄。... ...」

ここに説かれている内容には「外物」にもたらされるものとは思えないものも含まれていて、十惡の順番・項目も異なるが、業の果報としての外界の様相が悪化することを述べている。その内容は先にみた KV とその対応漢訳と比較すると、同じ外界の変化が別の惡に配当されていて互いに一致していない。おそらくこの段階では「外物」という点においての内容的な整備がなされていなかったようである。

外的事物に生ずるということに拘らなければ、阿含經典中には或る特定の不善業の結果を説く經典が多々見出されるが、そのうちの一つだけをここに示そう。これは喩えの形を取っているものの、KVに見られるような邪見と苦い果実との関連を説く經典で、パーリにも対応がある。

『増壹阿含經』卷第八「第十七・安般品」（五）（T 125, 2, 583a19-b2）：

爾時。世尊告諸比丘。「邪見衆生所念。所趣及餘諸行。一切無可貴者。世間人民所

不貪樂。所以然者。以其邪見不善故也。猶如有諸苦果之子。所謂苦果苦蔕子蔕蔕子
畢地繫持子。及諸餘苦子。便於良地種此諸子。然後生苗猶復故苦。所以然者。以其
子本苦故。¹⁹⁾」

Anguttaranikāya I.17.2 (I, 32):

“micchādiṭṭhikassa, bhikkhave, purisapuggalassa yañ c’eva kāyakammaṃ yathādiṭṭhi-
samattaṃ samādinnaṃ yañ ca vacīkammaṃ ... pe ... yañ ca manokammaṃ yathādiṭṭhi-
samattaṃ samādinnaṃ yā ca cetanā yā ca patthanā yo ca paṇidhi ye ca sañkhārā sabbe te
dhammā anīṭṭhāya akantāya amanāpāya ahitāya dukkhāya saṃvattanti. taṃ kissa hetu?
diṭṭhi hi, bhikkhave, pāpikā ti.

seyyathāpi, bhikkhave, nimbabijaṃ vā kosātakibijaṃ vā tittakalābubijaṃ vā allāya
pathaviyā nikkhittaṃ yañ c’eva pathaviraṣaṃ upādiyati yañ ca āporasaṃ upādiyati sabbam
taṃ tittakattāya kaṭukattāya asātattāya saṃvattati. taṃ kissa hetu? bijaṃ, bhikkhave,
pāpakaṃ.”

ここでは、邪見が悪報をなすことを毒や苦みを持つ植物に喩えているが、邪見によって苦みや毒を持つ植物が生えてくるという KV に見られた因果関係を表す内容にはなっていない。しかし邪見と苦い果実との連想が比喩として成り立っている以上、KV のように因果関係の上に両者を結びつけることを可能にする背景があったことが推測出来る。

以上、阿含資料の一部を見てきた。そもそも仏教における業論は直接的に人間の生活に関わっていて、しかも他者ではなく自己を主体とする行為が対象とされていた。「世記経類」を見ても分かるように、世界生成・衰退の過程で十善・十不善が関わってくるといっても、両者の結びつきは決して強いものではない。特に外界への影響力という観点から見ると、個々の業の因果関係が必ずしも特定されて説かれているわけではなく、全体として人の行為が世界の有様に連動して捉えられているだけである。その意味で、上記資料での業論はあくまでも「自業自得性」から説かれるものが中心的であり、業と世界とを結びつけての教説は一般的・通俗的な連想の下に述べられていると言えるだろう。(無論、資料の全てが時系列的に順次成立し流布していたわけ

19) 尚、この経典は鳩摩羅什譯『成實論』卷第十「邪見品」で言及されている (T 1646, 32, 318c15-22): 「如經中說。邪見人所起身口意業欲瞋思念。皆為惡報。如種苦瓠拘捺毒枝必害蔓陀樹種是中。所有地種水火風種皆為苦味。以種苦故。如是邪見人諸餘心心數法。以邪見故皆得惡報。是故此人。雖有施等終無好果。以先為邪見心所壞故。是人所作不善皆是增上。以久集惡心故。」

ではないのだから、阿含資料に存在するからと言って、思想の先後関係、業論の中心的・従属的関心という区別、その比重がどのように変化してきたのかということをこれらの資料で明らかに出来たわけではない。問題にしているのは個別の不善によってもたらされる結果を語る文献がアーガマの中に存在し、そこではどのように関係付けられていたのかという点である。）

3. 部派資料（有部）

さて、十不善業道によって「外物の悪化」という結果がもたらされるという関係が一部ではあるが阿含經典にも説かれていることを確認できた。そのような発想がKV特有のものではないことは明かなのであるが、続いて部派系としては最も資料的に充実している有部のものから十不善業道と「外物の衰損」についての記述を見ていこう。

まず『婆沙論』では「業道」が立てられる所以を次のように五種挙げる²⁰⁾。

玄奘譯『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第百十三（T 1545, 27）

問何故名業道。業道有何義。答思名為業。思所遊履究竟而轉名為業道。（587c18-20）。復有說者。由二因緣建立業道。一世所訶毀。二世所稱歎。即是十種不善業道及善業道。（588a2-4）。

復有說者。由三因緣建立業道。一由依處。二由施設。三由分別愛非愛果。（588a10-11）。

復有說者。若由此故令内外物。有時衰損。有時增盛。建立業道。當知此中所居為外。壽等為內。（588a11-14）。

復有說者。由三果故立十業道。一異熟果。二等流果。三增上果。（588c8-9）。

上記の第一のものは業道の定義付けである。第二以下はいわば業道とその結果についての経験的な因果関係を述べたもので、今問題とするのは第四、五の内容である。

20) この業道定義について詳細に扱っているものに加藤 [1979a] がある。尚、以下で検討する内容は『婆沙論』で「有説」として挙げられているので、必ずしも『婆沙論』では正統有部の見解とされていたとは言えない。しかし以下で見るように、『俱舍論』等の有部系文献がそうした見解を踏襲していることから広い意味で有部の見解と見なしておく。この点については、註 25 も参照のこと。

3. 1. 外法の衰退（『婆沙論』・『俱舍論』他）

『婆沙論』に第四として挙げられる「外物の衰損」は、『俱舍論』等で説かれる内容と若干の違いが見られる。そこで『俱舍論』梵本、玄奘訳、真諦訳との訳語の違いを含めて対比させ（必要な場合には Yaśomitra 註、『順正理論』、更に *Abhidharmadīpa* も参照した）、KV 及び対応漢訳で述べられる内容と対照させよう。

- (A) 玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』（T 1545, 27, 588a11-589a23）.
- (Ba) 玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』卷第十七「分別業品」（T 1558, 29, 90b22-91a1, esp. 90c8-15）.
- (Bb) 真諦譯『阿毘達磨俱舍釋論』卷第十三「中分別業品」（T 1559, 29, 245b9-c14, esp. b23-c2）.
- (C) 玄奘譯『阿毘達磨順正理論』卷第四十二「辯業品」（T 1562, 29, 583a25-c28, esp. c10-17）.²¹⁾
- (D) *Abhidharmakośabhāṣya* (Pradhan: 254, 8-12).
- (D+) *Abhidharmakośabhāṣya-vyākhyā* (Wogihara: 418, 24-34).
- (E) *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti* (Jaini: 177).
- (F) (*Mahā-*)*Karmavibhaṅga* (§ § 52-61).
- (G) 『佛爲首迦長者説業報差別經』[Ch-5].
- (H) 『分別善惡報應經』[Ch-6].

1. 殺生（殺命）業道（= KV § 52）.

- (A) 一切外物皆少光澤不久堅住：「全ての外物は皆光沢を失い、長持ちしなくなる」
- (Ba) （謂外所有諸資生具。）由殺生故光澤鮮少。
- (Bb) 由殺生所事修習數起。一切外資生具無復勢味。
- (D) *prāṇātipātenātyāsevitena bāhyā bhāvā alpaujaso bhavanti*: 「殺生を習することによって、外の事物の光沢／勢力（ojas）が失われる」
- (D+) On *bāhyā bhāvāḥ: oṣadhibhūmyādayaḥ* (418, 26): 「『外物』とは。菓草や大地などである」
- (E) *prāṇātipātenātyāsevitena bāhyā bhāvā alpaujaskā bhavanti*.

21) 玄奘譯・衆賢『阿毘達磨藏顯宗論』卷第二十三「辯業品」（T 1563, 29, 883b9-c9）も同じ。『順正理論』に関しては異なっている場合だけを挙げることにする。尚、『順正理論』の当該部分については佐々木現順 [1990: 338-341, 374-375] 参照の事。

(F) prāṇātipātasyākuśalasya karmaṣaṭṭhāsyā vipākena pṛthivyā(m ojaś ca tejaś cānta)rddhiyante
| tasyaiva ca karmaṇo vipākenālpāyur bhavati ||

(G) 一者以殺業故。令諸外報。大地鹹鹵。藥草無力。

(H) 殺命爲因。壽量色力而非滿足。

2. 不與取（偷盜）業道 (= KV § 53).

(A) 一切外物有災有患。多遭霜雹塵穢等障：「外物には様々な不都合が生じて、霜、雹、塵、穢といった差し障りに頻繁に遭遇することになる」

(Ba) 不與取故多遭霜雹。

(Bb) 由偷盜故。多霹靂多塵。

(C) 不與取故多遭霜雹。稼穡微薄果實希小。

(D) adattādānenāśanirajobahulāḥ: 「不與取によって雹 (āśani) と塵 (rajas) が多くなる」
(D+) On āsanirajobahulāḥ: āśaniḥ śilavarṣam. rajo dhūlivṛṣṭiḥ kṣāravṛṣṭir vā. yataḥ sasyādivināśaḥ (418, 27): 「『雹と塵が多くなる』とは。雹とは石の雨のことである。塵とは塵埃の雨、或いは鹹水の雨のことで、それによって穀物等が損なわれる」

(E) adattādānena parittaphalā alpasasyā āsanibahulāḥ.

(F) adattādānasyākuśalasya karmaṣaṭṭhāsyā vipākena pṛthivyā m āśaniśukaśalabhamūṣikakīṭaprabhṛtaya(ḥ sasyaghātakā utpadya)nte | tasyaiva karmaṇo vipākena bhogavyasanam adhigacchati ||

(G) 二者以盜業故。感外霜雹螽蝗蟲等。令世飢饉。

(H) 偷盜所得霜雹蟲蝗飢饉水旱。

3. 邪婬（欲邪行・邪欲）業道 (= KV § 54).

(A) 一切外物多有怨競：「全ての外物に怨み、競争心が増えることになる」

(Ba) 欲邪行故多諸塵埃。

(Bb) 由邪婬故多塵垢。

(D) kāmamithyācāreṇa rajo 'vakīrṇāḥ: 「欲邪行によって塵がまいあがる」

(D+) On rajo 'vakīrṇāḥ: dhūlir utthitā (418, 28).

(E) kāmamithyācāreṇa rajo'vakīrṇāḥ.

(F) kāmamithyācārasya akuśalasya karmaṣaṭṭhāsyā vipākena tṛṇadarbhādīni (B: tṛṇakuśavanadurga{va})sarvadurgandhāni) prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo

vipākena saṃpannaṃ gṛhāvāsaṃ pravisanti | [omit]

(G) 三者邪姪業故。感惡風雨。及諸塵埃。

(H) 邪欲所獲外多塵垢妻不貞良。

4. 妄語（虚誑語）業道（= KV § 55）.

(A) 一切外物多諸臭穢：「臭穢が増える」

(Ba) 虚誑語故多諸臭穢。

(Bb) 由妄語故多臭穢。

(D) mṛṣāvādena durgandhāḥ: 「虚誑語によって悪臭がただよ」

(E) mṛṣāvādena durgandhāḥ.

(F) mṛṣāvādasya akuśalasya karmaṇasya vipākena muṣarogadantarogagalaroga-mukhādaugandhāḍiṇi prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo vipākenābhūtākhyānaṃ pratilabhati ||

(G) 四者妄語業故。感生外物。皆悉臭穢。

(H) 虚妄所獲臭氣惡名人皆嫌厭。

5. 兩舌（離間語）業道（= KV § 56）.

(A) 一切外物多不平正。丘陵坑坎峻阻懸隔：「平らかなものがそうでなくなり，丘陵が出来，凸凹が生じ，険しくなり，行き来するのが難しくなる」

(Ba) 離間語故所居險曲。

(Bb) 由破語故。外器有高深。

(D) paisūnyenotkūlanikūlāḥ: 「離間語によって（土地に）凸凹（utkūla-nikūla）ができる」

(E) paisūnyenotkūlanikūlāḥ.

(F) piśunavacanasya akuśalasya karmaṇasya vipākena pṛthivyāṃ śarkarakatṭhalyāḍiṇi duḥkhasaṃsparśāḍiṇi prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo vipākena jātivyasanā mitravyaśanā bhavanti bhedyāḥ parivāraś ca bhavati ||

(G) 五者兩舌業故。感外大地。高下不平。峻崖峻谷。株机槎菜。

(H) 離間所獲眷屬不和疾病縈纏。

6. 惡口（僇惡語）業道（= KV § 57）.

(A) 一切外物僇弊鄙惡毒刺沙礫。設有金銀等寶少而無光不調難用：「全ての外物は

あらく粗末になり、見苦しく悪くなり、毒を持った刺が生え、砂利が増えることになる。また金銀等の宝が在っても少なく光輝かず、細工し難い。」

- (Ba) 麤惡語故田多荊棘磽确鹹鹵稼穡匪宜。
- (Bb) 由惡語故其地惡味。高燥相違不宜一切。
- (C) 麤惡語故多諸惡觸。田豐荊棘磽确鹹鹵。
- (D) *pāruṣyeṇoṣarajāṅgalā pratikruṣṭāḥ pāpabhūmayāḥ* 「麤惡語によって鹹分多く (*uṣara*) 不毛の地 (*jaṅgala*) となり、劣悪となり、不良の地となる」
 (D+) *On uṣarajāṅgalāḥ: uṣarāś ca jaṅgalāś ca te. bāhyā bhāvā ity adhikṛtāḥ. tā bhūmaya ihābhipretāḥ* (418, 28-29): 『『鹹分多く不毛の地』とは。鹹分があって不毛であるもののことで、『外物』に係わっている。ここではそうした地が意図されている」
- (E) *pāruṣyeṇa duḥsparśāḥ kaṇḍukaprāyāś ca.*
- (F) *paruṣavacaso 'kuśalasya karmapathasya vipākataḥ pāmśurajodhūlivātavṛṣṭyādini prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo vipākena amanojñāśabdaśravaṇadarśaṇāny anubhavanti |*
- (G) 六者惡口業故。感生外報。瓦石沙礫。麤澁惡物。不可觸近。
- (H) 麤惡所獲觸對硬澁果實非美。

7. 綺語（雜穢語）業道 (= KV § 58).

- (A) 一切外物時候乖變。速疾磨滅多不成實：「全ての外物は時候にそぐわなくなり、直ぐに磨滅し、実を成さなくなる。」
- (Ba) 雜穢語故時候變改。
- (Bb) 由非應語故。時節不調適。四大變異不平等。
- (D) *sambhinnapralāpena viṣamartupariṇāmāḥ*: 「雜穢語によって気候が不順に転ずる」
 (D+) *On viṣamartupariṇāmāḥ: viṣama ṛtuṣariṇāma eṣām iti viṣamartupariṇāmāḥ sasy'ādaya oṣadhayaḥ. yasmin ṛtau varṣitavyam. tatra na varṣati. yasmin śītena bhavitavyam. tasmin na śītam. yasminn uṣṇena bhavitavyam. tatra tan ne bhavatiti yojyam* (418, 30-33): 『『気候の不順』とは。季節の変異が不規則になることである。(これらは) 穀物等の菓草のことである。(即ち) 雨が降るべき季節に、雨が降らない。寒くなるはずの(季節に) 寒くならない。暑くなるはずの(季節に) そうならない、というように理解すべきである」
- (E) *sambhinnapralāpena viṣamapariṇāmāḥ.*

(F) saṃbhinnapralāpasya akuśalasya karmaṣaṣya vipākena (parva) takandaraśvabhrādīni
prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo vipākena anādeyavacanā bhavanti ||

(G) 七者綺語業故感生外報。令草木稠林。枝條棘刺。

(H) 雜穢所獲林木叢刺園苑荒殘。

8. 貪欲（貪愛）業道（= KV § 59）.

(A) 一切外物多分損減微細少：「全ての外物は殆ど損減し、微細となり、少くなる」

(Ba) 貪故果少。

(Bb) 由貪欲故。一切所種果實少弱。

(D) abhidhyayā śuṣkaphalāḥ: 「貪によって実が干からびる」

(E) abhidhyayā pacitaphalāḥ (pācita-?).

(F) abhidhyayā akuśalasya karmaṣaṣya vipākena vrīhiyavagodhūmādīnāṃ śasyānāṃ
tuṣapālādīni prādurbhavanti | tasyaiva karmaṇo vipākena paraprārthanīyānāṃ
bhogā bhavanti ||

(G) 八者以貪業故。感生外報。令諸苗稼子實微細。

(H) 貪愛所獲。庫藏寡少。

9. 瞋恚業道（= KV § 60）.

(A) 一切外物多分枯悴果實苦澀：「全ての外物は殆ど枯れやせ細り、果実は苦く澀くなる」

(Ba) 瞋故果辣。

(Bb) 由瞋恚故。一切所生皆悉苦。

(D) vyāpādena kaṭukaphalāḥ: 「瞋によって実が苦くなる／刺をもつ (kaṭuka)」

(E) vyāpādena kaṭukarmaphalāḥ. (for kaṭuka-).

(F) vyāpādasya akuśalasya karmaṣaṣya vipākena prabhūte upate niṣphalam asya phalaṃ
vāsasyaṃ bhavati | tasyaiva ca karmaṇo vipākena pratikūladarśano bhavati ||

(G) 九者以瞋業故。感生外報。令諸樹木果實苦澀。

(H) 瞋恚所獲果味辛辣容貌醜惡。

10. 邪見（愚癡）業道（= KV § 61）.

(A) 一切外物多分零落。乏少花果或全無果：「全ての外物は殆ど萎れて落ち、花・

果実は減り、或いは全く無くなってしまおう」

(Ba) 由邪見故果少或無。

(Bb) 由邪見故。一切資生或少果或無果。

(D) mithyādr̥ṣṭyā alpaphalā aphalā vā: 「邪見によって実は少なく、或いは無くなる」

(E) mithyādr̥ṣṭyā bijād apakṛṣṭaphalā aphalā vā.

(F) mithyādr̥ṣṭ(e)r akuśalasya karmapathasya vipākena tiktakaṭukā bhavanti |
picumandakoṣātakīviṣatikālābuprabhūṭini phalāni prādurbhavanti | tasyaiva ca
karmaṇo vipākato nāstikyavādi bhavaty ucchedadr̥ṣṭiḥ | lokāyatanādiṣu ca śāstreṣu
prasādo bhavati | [omit]

(G) 十者以邪見業故。感生外報。苗稼不實。收穫尠少。以是十業。得外惡報

(H) 愚癡所獲外色不潔果實虛耗。十不善業因之所得

以上が「外法の悪化」に関する諸資料である²²⁾。『婆沙論』に第五として挙げられている三種の果報は先ず、「異熟果」が十不善業道全てに共通していて、それは地獄に堕ち、鬼趣に生まれることである。「等流果」は人として生まれた場合、順に「多病短命・財寶匱乏・妻不貞良・多遭誹謗・親友乖離・恆聞種種不如意聲・言不威肅・貪欲猛利・瞋恚猛利・愚癡猛利」となること²³⁾、「増上果」は先に見た「外物衰損」の内容と一致する。

22) 『婆沙論』ではこの後で「外物」の増益することが述べられるが、それらは前述の内容の逆になっている。更にそれに引き続いて、十不善業道が増長することによってこの世界に4種の衰損が起きることが述べられる。その4種とは「壽量衰損・有情衰損・資具衰損・善品衰損」である。最初の壽量衰損は劫の始めには人の寿命は無量であったが、劫末には十歳にまで減少することを言い、有情衰損とは劫末に僅か万人のみがこの世にいることになること、資具衰損とは食物が豊富であったものが飢饉に陥ること、善品衰損とは十善業道が増長していたのが、劫末には十惡業道が盛んになることを言う (T 1545, 27, 588a29-b11)。

ところで、法寶撰になる『俱舍論疏』卷第十七「分別業品」(T 1822, 41, 674b25-c2) には、外物に衰損が起る由来が説明されている。それによると、その理由は順に「他者の光沢を破壊するから」(壞他光澤故)、「他のものを損なうから」(損他物故)、「他のものの名を汚すから」(汚他名故)、「他人を誑かして聞きたくもないことを聞かせるから」(誑他人不欲聞)、「両者が親しく往来し難くさせるから」(親番往來難故)、「言葉によって他人を傷つけるから」(語傷人等故)、「その言説自体が正しくないから」(是說非故)、「自分が貪ることによって他のものの取る物を減らそうとするから」(欲減他物故)、「怒りと同様に辛辣になるから」(辛辣如嗔故)であり、「その邪見が軽いものであればその結果はまだ軽く、重ければ結果が無いから」(輕即果少。重即果無)であるという。

23) 『雜阿含經』第1048經には、業によって地獄に生まれ、もし人中に生まれるならば何々となるという記述がある (T 99, 2, 274a25-b22)。その内容は『婆沙論』等の「等流果」のそれに対応し、最後の3つを除けばKVとも対応する。

3.2. 有部系資料との対比

以上の対照から、KV (= F) の記述が有部系の資料とは異なっていることが明らかである。業道ごとにその内容をみていこう。

最初の殺生業道では、ojas という語の理解によって違いがでるが、「光沢・勢力」が失われる点で全ての資料がほぼ一致している。第二の不与取業道では、穀物等が損なわれるという点では全てが一致し、KV は害をなすものについてより詳細になっている。また、直接「飢饉」に言及するのも KV とその対応漢訳だけである。邪淫業道では、塵埃が増加するという点において A、F 以外が一致し、A と F はまた互いに異なる。KV の記述は悪臭が広がるという点で次の妄語業道と共通する部分があるが、そこでは人から生ずる悪臭に限られている。

語に関する業道のうち、妄語業道は悪臭・汚れが増えるという点ではほぼ全てが一致する。両舌業道では A-E、G が大地に高低が生じ険しくなるという点で一致し、F と H はまた異なる。但し、眷屬に不和が生じるという他に見られない内容を共通に持っている。悪口業道では、土地が不毛となり様々な障害物が現れるという点では H を除く全てがほぼ一致する²⁴⁾。H の内容は 8 の食欲業道のそれに近い。綺語業道では A-E が天候不順という点で一致し、KV とその対応漢訳は互いに異なる。ただ漢訳二本はほぼ一致する。KV の記述は 5 に見られる他文献での内容に近い。

意に関するもののうち、食欲業道は果(実)の中身・サイズが小さいことを意味するとすれば、KV を除く全てが一致し、更に実が少ないことが実の中身がないことを含意するならば KV も一致する。瞋恚業道では、果実が苦く渋いという点で KV を除く全てが一致。KV の内容は他文献では 8 もしくは 10 に相当するものになっている。最後の邪見業道では果実が少なく或いは無いことについて KV 以外は全て一致する。KV の内容は 9 に見られる他文献での内容に等しい。

3.3. KV と有部

さて、KV が全体としては「外法の悪化」の内容について有部系文献と大きく相違している一方で、KV の対応漢訳が若干のずれはあるものの有部系のものに一致する傾向にあることが分かった。特に最後の三つの業道に関しては KV のみが突出して異なっており、その相違は何に由来するものであろうか。先に、KV が業と業道それぞ

24) A だけには貴金属に関する記述がある。この記述は「世記経類」等で見つ「金銀琉璃七寶珠玉自然沒地。唯有石沙穢惡充滿。」に関係しているようにも思える (2.1, 2.2 での引用文参照)。

れによってもたらされる果報に関して、意識的に内的・外的発現を区別していたのではないかと指摘した。この問題をあらためて見ていきたい。

問題は二つある。一つは業道による果報が *vipāka* と呼ばれている点である。有部の理解では業道に三種の果を区別するが、「外法の悪化」は増上果 (*āhipatya-phala*) であって、異熟果 (*vipāka-phala*) ではない。有部の増上果に相当する内容 (外法の悪化) が KV では「業道の結果によって (*karmapathasya vipākena*)」として言及されている。他方で KV には「業の結果として (*karmaṇo vipākena*)」もたらされるそれぞれの結果が併記されているが、その内容は『婆沙論』等で述べられている等流果の内容に相当する。つまり *vipāka* という一つの語によって有部で区別している三種の結果のうち「等流果」と「増上果」に言及しているのであって、KV ではこの語を有部で用いるような「果報」(*phala*) の一種としての意味で用いていなかったことを示している。

もう一つの問題は前述の問題と関連するが、業道の果報と併記する形で十不善全てに業としての結果を認める点である。我々が持つ部派的な理解によれば、十 (不) 善業道の内、有部は前7つを業にして業道と認め、後3つを業道ではあるが業とは認めていない。従って、それら三業道については等流果として語られるのは貪瞋癡のそれぞれが盛んになるということであって (「貪欲猛利・瞋恚猛利・愚癡猛利」)、他の業道のように具体的に現れる内容を述べないのである。ところが KV では明らかに「業の結果」として具体的な内容を記述しており、この点も『婆沙論』等とは異なった理解をしていることになる²⁵⁾。つまり、業と業道の違いを意識しながら、しかし有部とは異なった立場を保持していたことになる。尚、十不善業道の内、前七者の内容では両者それぞれの「業の結果」と「等流果」は一致している。

現在までの研究では KV が有部系ではないことはほぼ確定している²⁶⁾。ここにもその所説内容から有部系であることを否定する資料が見出せる。更にこの対照から別の問題もあらためて提起されることになる。即ち、KV と対応漢訳とがその記述内容に関して相違するということは、「鸚鵡經類」の展開において個々のヴァージョンに部派的な (したがって、思想的な) 差異を視野に入れながら考察しなければならないことである。例えば、二つの対応漢訳が「業道」ではなく「業」の結果としての「外法の悪化」を述べている点はむしろ阿含資料での扱い方に近く、KV のような使い分けをしていなかった段階を示していると考えられる。

4. まとめ

ここまで見てきたことはその資料を初期から部派系のものに限定してあるのだが、業によってもたらされる果報の結びつきとその内容の違いから KV だけが有部系の記述と異なることが確認できた一方で、内容に違いはあるものの、業の果報が個人に具現する以外に人間が暮らすこの世界にも影響を及ぼすという論述が広く共有されていたことを確認できた。このように業報の及ぶ対象が拡大されたことは、業という概念

- 25) 本稿では内容的に対照作業が可能になる有部資料との対照を行ったので、他学派との相違は特に取り上げることが出来なかった（資料が乏しいことも理由であるが）。但し、十種全てを業にして業道と認める立場もある。即ち、『俱舍論』に説くところでは「譬喩論師執貪瞋等即是意業」であるという（舟橋 [1954: 190-191, 334] によると、「譬喩論師」はチベット訳では「經部」とされている）。また正量部の非福説で説かれる意業について、並川 [1992: 523] は「貪など三種が悪趣の業と道ではなく、それらと相応する思が因と道である」という『有爲無爲決擇』に引用される正量部の業道定義が、貪など三つが業道であり殺生等の七つが業にして業道であることを述べている『俱舍論』の一節を引いて（AKBh 244.6-8; 『俱舍論』 T 1558, 29, 88c）、「基本的に同じ立場に立つ説である」としている。残念ながら、意業の取り扱いについて KV がどのような立場であったのかは分からない。

尚、瑜伽行唯識学派ではほぼ有部系の理解に沿って十不善業道によってもたらされる結果を記述している。例えば、*Abhidharmasamuccaya* § 66 (ed. by P. Pradhan, Santiniketan: Visvabharati, 1950, 54.3-10)（復元梵文）＝『大乘阿毘達磨集論』卷第四（T 1605, 31, 679a25-b1）；*Abhidharmasamuccayabhāṣya* § 66 (ed. by N. Tatia, Patna: K. P. Jayaswal Institute, 1976, 65. 1-20)＝『大乘阿毘達磨雜集論』卷第七（T 1606, 31, 728a16-b14）；*Yogācārabhūmi* (ed. by V. Bhattacharya, University of Calcutta, 1957, 184.6-9)＝玄奘訳『瑜伽師地論』卷第九（T 1579, 30, 318a18-22）。『同』卷第六十（ibid., 633b27-634a2）（梵本無し）には更に詳細な内容が語られている。上記の *Abhidharmasamuccayabhāṣya* の当該箇所に関しては最近 Robert Kritzer がテキスト校訂上の問題点と共に論じている（“The ‘Additional Leaf’ of the *Abhidharmasamuccayabhāṣya* Manuscript: the Results of the Ten Bad Courses of Action,” in: *Journal Asiatique* 290.2, 2002, 465-484）。それらのソースについて彼が見出せた最も早いものとして『婆沙論』（本稿 § 3.2 で言及した箇所）を挙げるが、そこで不善業道によってもたらされる三種の結果が「復有説」という語で語られている点について、このような区別が「正統有部の思想ではなかったことを示唆している」と注意を促している（p. 473）。しかし、註 20 で述べたように、『俱舍論』・『順正理論』がその区分を踏まえている以上、正統であるかどうかはここでの議論に差し支えないと考えている。

- 26) 参考文献に挙げた並川孝儀による一連の論考で明かにされた。それに先立つ研究では例えば Lévi [1932: 11-12] が「根本説一切有部」系の文献への対応がないことから、それへの所属を否定し、Ch. B. Tripāthi (“Karmavibhaṅgopadeśa und Berliner Texte,” in: *WZKSÖ* X, Wien, 1966, pp. 214-215) は KVU に引用される *Catuṣparśadasūtra*, *Mahāparinirvāṇasūtra*, *Mahāsamijjyasūtra* がトルファン出土の有部系テキストと内容的には対応するものの、細かい点では異なっていることから、消極的ではあるが有部所属を否定する。更に英文での要約部分には漢訳対応文献を独訳で見た限りでの印象として「法藏部」の可能性を示唆するが、何ら根拠は示されていない（ibid., 219）。他方、写本 B に付随する二枚のサンスクリット写本は明らかに「ロンドン写本カンギル」にある KV のチベット訳（No. 202 = Tib3）に近く、またその内容が有部系の伝承に近似することも指摘されている（T. Fukita, “Sanskrit Fragments of the *Karmavibhaṅga* Corresponding to the Canonical Tibetan and Chinese Translations,” in: *The Bukkyō Bunka Kenkyūsho Nenpo* 7-8, 1990, pp. 8-11）。尚、「ロンドン写本カンギル」は戒律部所収の文献の配列から根本説一切有部の伝承に近いと指摘されている（H. Eimer, “Zur Reihenfolge der Texte in der Abteilung Vinaya des tibetischen kanjur,” in: *Zentralasiatische Studien* 20, 1987, 219-227）。

がより詳細に深化して考察されたと見る事が出来るが、これは部派仏教における考察・関心がより存在論・認識論へ傾倒していくことと無関係ではあるまい²⁷⁾。人の身に現れる業因業果の関係が外界に見られる様々な事象と重ね合わされるとき、両者を繋ぐものが「業」であると理解された。即ち、業思想の外界世界への応用と言ってよい。そして世界の生成・衰損は人の業によって（その増上力によって）もたらされるという因果関係の上に立って詳細に説明されることになる。この考え方は既に見たように初期の經典にも見られるから、仏教思想において決して外界の問題を等閑視してきたのではないと言えるのだが、しかしながら注意すべきは、このように説かれる発想はあくまでも我々の側（即ち有情世間）にある業の問題から出発していたという点である。初期經典と部派資料の違いはどれほど両者の結びつきを整備しまとめ上げるか、より個別化・特化し、人とそれを取り巻く環境との間に何らかの因果関係を業報の名の下に設定していく点にある。

視点を替えよう。仏教の宇宙論を眺めるとき、そこに初期段階では単に連動した関係にあると捉えられていた人の行為と世界との関係がより具体的・個別的に対応させられ、徐々に業論に基づく終末意識の下に世界観が形成されていった過程を見て取る事が出来る。その終末が実は我々の側にある業によってもたらされるという部派を越えた主張は、一方で存在論や認識論の発展と軌を一にしているが、それだけではなく、恐らくは当時の仏教徒たちの時代意識が（程度に強弱はあれ）反映されていると理解すべきであろう。岡野潔による一連の正量部研究の中に、特に正量部が持っていた強い危機意識についてまとめた論考がある。それによれば、インドにおける末世観は“第一期「先駆期」(前二～後三世紀)”, “第二期「準本格期」(後四～五世紀)”, “第三期「本格期」(後六世紀～)”に分けることが出来、仏教内部の墮落、衰退に加えて様々な社会的・環境的要因によって末世観がより深刻なものとして確立していく²⁸⁾。彼の言う第二期は「仏教全体の勢力漸減の意識、時代の進行への不安な危機意識」が強くなり、その為「本気で仏法の消滅が懸念されるようになる」のであるが、特に正量部では四世紀には「劫末意識」²⁹⁾を確立していたとされる。そして「正量部の劫末

27) 例えば共業・不共業の観点から器世間について論じた舟橋 [1974: 62], 雲井 [1979: 57-61], 佐々木現順 [1990: 176-188] を参照のこと。

28) 岡野 [2000b: 404-2]。

29) 岡野は終末観という概念を次のように区別する [2003: 96]: 「仏教主流の終末意識・時代観を「末法意識」と、また正量部の危機意識を伴った終末意識・時代観を「劫末意識」と表現したい。」後者は正量部資料に語られる、小三災のうち飢饉災がやって来て人類がほぼ全滅するという予言に導かれた「七百年後に迫り来る劫の終わりを確信した終末意識」[ibid., 94] である。同様の使い分けは同 [2000b] にもある。

意識はおそらく四世紀以前からあったかもしれないが、その後インド仏教徒が最大の不安の世紀である六世紀を迎えた時、その意識は確信を得たことであろう。(略) この六世紀において終末観は正量部ばかりでなく大乘教徒の中にも本格化した、両者は並行的な関係にある。」³⁰⁾

岡野による仏教の終末観の時代区分と「鸚鵡経類」の漢訳への翻訳時期を重ね合わせて見たときに、我々は幾つかの符合する流れを見て取ることが出来る。我々の手にするサンスクリット本 KV はその成立は不明であるが³¹⁾、対応する漢訳についてあらためてその訳出年代と訳者を見てみよう。

Ch-1『佛説兜調經』失訳 [265-316 CE.]

Ch-2『中阿含經』『鸚鵡經』僧伽提婆 [397-398 CE.]

Ch-3『佛説鸚鵡經』求那跋陀羅 [435-443 CE.]

Ch-4『佛説淨意優婆塞所問經』施護 [982-1017 CE.]

Ch-5『仏爲首迦長者説業報差別經』瞿曇法智 [582 CE.]

Ch-6『分別善惡報應經』天息災 [982-1000 CE.]

前四者は所謂「鸚鵡経類」第一類に属するが、そのうち Ch-4 は 11 世紀前後の訳出でありながら、その内容はパーリ本に近い。何故、この時期にパーリ本と同系のものがわざわざ訳出されたのか、その事情は全くわからないが(諸訳経録でも宋代の訳経云々という記事のみがある)³²⁾、内容的な部分では今問題とする点からは除いて考えていいだろう。

Ch-3 求那跋摩訳『佛説鸚鵡經』は訳者同定に問題がある。水野 [1989: 8-9 (1996: 425-26)] によれば、『経律異相』(T 2121, vol. 53) に引用される『中阿含經』『鸚鵡經』は現行の『中阿含經』のそれに必ずしも一致せず、むしろ『佛説鸚鵡經』の方が『経律異相』での引用文に近いこと、またこの経の訳語・訳し方からみて『佛説鸚鵡經』は求那跋陀羅訳ではなく、失われた曇摩難提訳『中阿含經』(384-385 CE.) 所取のもの

30) 岡野 [2000b: 402] .

31) 山田 [1935: 110] では引用される諸文献の訳経史より見て「9 世紀頃行はれたものと考へられる」という。

32) 山田 [1935: 111] はこの經典名に「淨意」とある点を捉え、その原語を *subha* であったとする。一連の經典の共通項である「鸚鵡」が *subha* となるのは Pali の伝承に残るのみであるから、「パーリ系の原本であったかも知れない」。しかしこのような經典が訳されたことについては「餘程特殊の事情があつたであろう」と言うのみである。また並川 [1984b: 30-31] はパーリ本と『淨意經』の類似性・相違をより詳細に論じた後で「南方では Cūḷa から『淨意經』へと増広・改変されていったのではないか」とする。

ので『經律異相』の引用文の元はこれであろうとする。もしこの推定が正しければ、「鸚鵡經類」第一類所属の漢訳は全てが4世紀以前に訳出されたものであり、その成立・流布は更にその時期を遡ることになる。

他方、後二者はそれぞれ6, 10世紀とかなり後代の訳出である。これらは共に十不善業道に関わる業報を説くが、勿論両者の間にも説かれる業報の数に差異があり(Ch-5は75, Ch-6は98項目³³⁾), 明らかに第一類から二類へと展開した二つの異なる段階の姿を示している。

以上のことから、「鸚鵡經類」は少なくとも4世紀以前の第一類と、早くても6世紀前後から始まる第二類に分けることが出来、岡野による終末意識の時代区分に即して見ると、正量部の持つ「劫末意識」の時代(四世紀)を境にして「鸚鵡經類」は第一類から二類へと飛躍的に拡大していることになる。この第二類には、KVを中心にして本稿で扱ったように、自己の業が外的世界に影響を及ぼすという、おそらくは後世に付加された「十不善業道による世界の悪化」を説く節が含まれているのである。勿論、漢訳の年代とその原本の成立時期とのずれや、漢訳自体の所属部派の問題等も考慮しなければならないが、業報項目の拡大・多様化という「鸚鵡經類」の特徴は業報を無軌道に羅列していくような単なる増広と理解すべきではない³⁴⁾。

KV § § 51-61の記述が時代意識を反映したものと考えられることを更に裏付ける新たな証拠も岡野によって発見されている。邪見業道に関する記述が終わった後で一旦は十不善業道に関する節全体をまとめる文があるにも拘わらず、長文を要して胡麻・砂糖黍・乳の三種についてそれらの抽出したものが失われていくという内容がある³⁵⁾。十不善業道に言及する部分が付加された後におそらくは更に付加されたこの特異な記述は岡野によって正量部特有の世界観を反映したものであることが指摘され、並川孝儀が提出したKV正量部所属説³⁶⁾を別の観点から補強する。もはや紙数も超過

33) この經典での業報項目はLéviの数え方では101である。しかし、漢訳を詳細に見ていくと、対応が正確ではない。Léviが数えたCht (= Ch-6) § § 40-41は実際にはCh-6に存在しない(丁度上巻が§ 39で終わる)。またCht § § 72-76の5節がTib1 § § 73-76の4節に対応するとされているが、実際には4節のみが対応するので、ここでカウントに誤りが生じている。従って、合計3節の数え間違いが生じたことになる。

34) 「鸚鵡經類」の展開を論じている並川[1984c: 39]では、第二類の関係を次のように推定している。{Ch-5, Tib2}, {Ch-6, Tib3}, {Tib1, KV}の組み合わせでそれぞれが同系であるとし、第三のものが第一から展開したとする。対応関係から見るとこれらの組み合わせは正しいと思う。また、第二と第三を別系とすることも、所属部派が異なっていたと思われるから、正当である。おそらく基の『カルマ・ヴィバング』(業報の項目数は不明)は諸部派に共通に持たれていて、そこから部派によって異なった展開したのではないか(例えば、推測ではあるが有部系の第二組と正量部系の第三組というように)と思われる(拙稿[2004a: 246-247]参照)。

したので正量部文献との比較は岡野による一連の論考を参照されたいが³⁷⁾、彼の主張するように、KV § 61にあるその記述が正量部の伝承を受け継いでいるとするならば、「鸚鵡経類」はまさしく部派的相違を内在させ、そして終末論という時代意識を反映した内容を含有しながら展開したことになる。

一見異質とも見えるKVの十不善業道による業報の記述は、部派的相違を反映しながら実は当時の仏教徒が持っていた社会的不安や終末意識の産物でもあり、それは仏教の初期段階から要請されていた倫理規準の再表明なのである。「鸚鵡経」第一類から『カルマ・ヴィバング』への拡大・展開の背景には、教理的な必然性だけでなく、この文献群の多様な翻訳に顕著に現れているように、風土も気候も、また生活・社会体制も異なる地に暮らす仏教徒や一般の人々の社会不安や救済への希求があったことも無視出来ない。自己の行為に対する強いそして深刻な反省がやがて業報という直接的な因果関係の下に外的世界を認識し、新たな世界観が確立されていくが、その歴史の一つの文献的証拠がKVに存在するのだと言えよう。

[TEXT]

Sanskrit MSS of the *Karmavibhaṅga* (preserved at National Archives of Nepal):

MS[A]: Ms.-No. 4-20; MS[B]: Ms.-No. 1-1697

35) KV § 61. Lévi 80.5-7: 「人々がこれら十不善業道を更に働くようになればなるほど、先ほどの十の外法の出現が激しくなってくるのである (*yathā yathā satvā imān* dasākuśalān* karmaphāṇaṁ atīva bhāvayanti | tathā tathā eśā(m) dasānāṁ bāhyānāṁ bhāvānāṁ atīva prādurbhāvo bhavati*)」。Tib1にもKV同様に十不善業道の一つ一つについて述べた後で胡麻等の衰損を語っているが、このようなまとめの文は胡麻等の記述の後にある。漢訳では邪見による外法の悪化を説いて十不善業道による業報を説く部分が終わる。つまり、KVとTib1とに見られる胡麻・砂糖黍・乳を取り上げた部分は、十不善業道によってもたらされる結果を述べる諸節を加えた後で更に追加されたものであろう。

36) 特に並川 [1984a, 1984c, 1985b] 参照のこと。

37) 特に岡野 [2002a: 227-228] を参照の事。彼がネパール写本から発見した *Mahāsāṃvartanīkathā* (= MSK) という正量部の仏教カーヴィヤ文献での記述とKVの第61節にある胡麻等の一節がパラレルとなっていることの理由として二点挙げる：第一点は、両者とも三種の食物の消失を述べ、それを「外法」として捉えていること、第二に邪見の結果として虚無論者・断滅論者・ローカーヤタを挙げ、また食物の悪化があるとの記述がMSKとその基になったであろうチベット訳『有為無為決擇』中に引用される正量部文献Xと対応していることである。私は十不善業道の内容がKVと有部系資料と相違している点とこの部分が正量部文献とパラレルになっている点は、偶然ではなく、意図的になされたものではないかと推測している。特に邪見業道の結果が、有部系資料では「実が少なくなる・無くなる」であるのに対してKVでは「苦いものになる」とあり、それらの内容を逆にすればそれぞれが瞋恚業道の果報になること、KVの対応漢訳が有部系資料と一致しながら、KVだけが「苦いものになる」という内容を邪見業道の結果に配当し、更に外道思想と関連させており、そのような結び付きが正量部文献に正確にトレースできること、これら全てを偶然の産物を見なすには無理があるからである。この点については拙稿 [2004a] を参照されたい。

Sanskrit Text:

KV = (*Mahā-*)*Karmavibhaṅga: Mahākarmavibhaṅga (La Grande Classification des Actes) et Karmavibhaṅgopadeśa (Discussion sur le Mahā Karmavibhaṅga)*, par Sylvain Lévi, Paris, 1932.

Noriyuki Kudo, 2004. *The Karmavibhaṅga: Transliterations and Annotations of the Original Sanskrit Manuscripts from Nepal*. (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica VII), Tokyo: IRIAB.

AKBh.: *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. ed. by P. Pradhan (Tibetan Sanskrit Works Series 8) Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

Sphuṭārthā Abhidharmakośa Vyākhyā. ed. by U. Wogihara, 2 vols, Tokyo: The Pub. Association of Abhidharmakośavyākhyā 1932–1936 [rep. in one volume].

Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti, ed. by Padmanabh S. Jaini (Tibetan Sanskrit Works Series 4) Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1977.

Pāli Texts: Editions are based on those of the PTS.

Chinese Translations:

Ch-1:『佛說兜調經』失訳 (T 78, 1, 887b5-888b11) .

Ch-2:『中阿含經』第百七十「鸚鵡經」瞿曇僧伽提婆訳 (T 26 (170), 1, 703c21-706b11) .

Ch-3:『佛說鸚鵡經』求那跋陀羅訳? (T 79, 1, 888b16-891a13) .

Ch-4:『佛說淨意優婆塞所問經』施護訳 (T 755, 17, 588c9-590b7) .

Ch-5:『佛爲首迦長者說業報差別經』瞿曇法智訳 (T 80, 1, 891a18-895b21) [= Lévi: Chg].

Ch-6:『分別善惡報應經』天息災訳 (T 81, 1, 895b26-901b19) [= Lévi: Cht] .

[STUDIES](和文のみ):

単行書として出版され、業の問題を中心としたものとしては、以下を参考にした。

佐々木現順『業論の研究』京都：法蔵館，1990。

舟橋一哉『業の研究』京都：法蔵館，1954。；『業思想序説』京都：法蔵館，1956；『俱舍論の原典解明—業品』京都：法蔵館，1987。

『仏教学セミナー』「特集・業思想の研究」20，1974。

特に 水野弘元「業に関する若干の考察」pp. 1-25；舟橋一哉「仏教における業論展開の側面」pp. 45-65；佐々木現順「業論の本質」pp. 66-92；桜部建「功德を回施するという考え方」pp. 93-100；雲井昭善「インド思想と業（序章）」pp. 387-403。

雲井昭善編『業思想研究』京都：平楽寺書店，1979。

特に 雲井昭善「インド思想における業の種々相」pp. 1-71；藤田宏達「原始仏教における業思想」pp. 99-144；玉城康四郎「原始経典における業異熟の究明」pp. 145-230；前田専學「仏弟子における出家の動機とさとの様態—Theragāthā, Therīgāthāの世界」pp. 231-261；舟橋一哉「優婆塞の五戒について—阿毘達磨俱舍論業品とその称友疏との和訳」pp. 263-284；桜部建「『俱舍論』に見える業論」pp. 285-304。

尚、同書には巻末にその当時までに発表された業思想に関する欧文・和文論文がまとめられている (pp. 35-79(L))。

榎本文雄

- 1982「雑阿含 1299 経と 1329 経をめぐって—Gāndhārī Dharmapada 343-344 と Turfan 出土梵文写本 No. 50 の同定と Mahābhārata 13.132 の成立」『印度學佛教學研究』30-2, 963-957.

岡野潔

- 2000a「初期仏教のコスモロジーと善悪」『日本佛教學会年報』65, 225-238.
 2000b「正量部の歴史的宇宙論における終末意識」『印度學佛教學研究』49-1, 406-402.
 2002a「正量部の伝承研究 (1): 胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化に見る人間の歴史」『櫻部建博士喜寿記念論集・初期仏教からアビダルマへ』京都: 平樂寺書店, 217-231.
 2002b「正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点」『印度學佛教學研究』51-1, 393-388.
 2003「インド仏教正量部の終末観」『哲學年報』62, 81-111.

梶山雄一

- 1992「仏教の終末論」『さとりと廻向—大乘仏教の成立』京都: 人文書院, 9-49.
 1997「仏教終末論ノート—『世記経』と『俱舍論』」『渡邊隆生教授還暦記念論集・佛教思想文化史論叢』京都: 永田文昌堂, 344-331.

加藤宏道

- 1978「業と業道」『印度學佛教學研究』26-2, 148-149.
 1979a「説一切有部における意業道」『佛教學研究』35, 47-66.
 1979b「不善根と意不善業道」『印度學佛教學研究』27-2, 215-218.

川田熊太郎

- 1954「大乘佛教の倫理思想」宮本正尊編『大乘佛教の成立史的研究』第二章第一節, 57-103.

工藤順之

- 2004a「Karmavibhaṅga 第 61 節における付加部分の検討—正量部所属説有力資料とされる一節」『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』7, 225-254.

坂本幸男

- 1933「阿毘達磨に於ける業論の一考察」『大崎學報』82, 100-140.

佐々木教悟

- 1978「戒学研究序説: 十善業道を中心にして」『大谷大学研究年報』30, 1-48.

土橋秀高

- 1957「十善戒の系譜: 世間法より菩薩戒」『龍谷大學論集』355, 45-65.

並川孝儀

- 1984a「Mahākarmavibhaṅga 所引の経・律について」『佛教大学研究紀要』68, 53-76.
 1984c「鸚鵡経の展開—特に Mahākarmavibhaṅga を中心として」『佛教研究』14, 27-43.
 1985b「Mahākarmavibhaṅga の所属部派について」『印度學佛教學研究』33-2, 773-769.
 1992「正量部の非福説」『印度學佛教學研究』40-2, 517-527.

平川彰

- 1968「初期大乘仏教の戒学としての十善道」芳村修基編『仏教教団の研究』, 167-203.
 1991「初期大乘仏教における在家と出家」『佛教學』31, 1-39.

2000「十善戒の検討と戒論」『原始仏教の教団組織Ⅰ』東京：春秋社，166-184.

北条賢三

1981「十善業の源流とその展開」『勝又俊教博士古稀記念論集・大乘仏教から密教へ』，
67-84.

水野弘元

1989「漢訳『中阿含経』と『増一阿含経』」『佛教研究』18，1-42（『水野弘元著作集・第1
巻』東京：春秋社，1996，415-471 に再録）.

山田龍城

1935「鸚鵡経」『文化』2-3，103-113.